日本の輝ける未来のため、「世界」に夢を描ける若者を育てたい

2010年10月、国際関係学部特別招聘教授に就任した元外務事務次官の薮中三十二氏。
日本、そして世界の将来を担う「若者の力」に熱い視線を送り、
長年にわたる外交の現場での経験を学生たちに余すことなく伝えている。

国際関係学部　特別招聘教授
薮中三十二

世界で通用する言葉を持った人に

私が青春時代を過ごした'60～'70年代、若者は誰しも世界に夢を抱き、世界を舞台に活躍することを目指していました。いま時代は変わり、世界は若者にとって必ずしも夢を描く対象ではなくなっている。けれどこれからの日本には、若者がよりいっそう意欲を持って世界とのかかわりを持つことが必要です。40年余りの間、海外の国々と渉り合ってきた自らの経験を若い人たちと共有すれば、日本の将来に役立てることができるかもしれない。学生たちと互いに刺激し合うことは自分にとっても新しいチャレンジになると考え、立命館の教壇に立つことにしました。

国内の経済が先細りしていく今、日本が生き抜くためにはグローバルな勝負をしていかなければならない。では、世界で勝負ができる「グローバルな人」とはどんな人材なのか。私は「ロジックを持って、はっきりとスピークアウトし、その結果として『アウトスタンディングなパフォーマンスをした』と言われる人」だと考えています。これは、わざと英語で表現しているのですが、日本語では「理屈っぽく、口数が多くて、目立ちたがり屋」となり、日本的美徳で捉えるとずいぶん聞こえがよくない（笑）。けれど国際社会では自分の考えをうまく表現することがなによりも大切です。ものづくりについて言えば、これまでは、もの自体が良ければ評価されましたが、今はもの自体の良さにコンセプトなどを加味したものでないといけない。相手に魅力を伝える「言葉」がますます必要な時代、語学力と言う意味だけでない「世界に通用する言葉」で自分の意見を伝えられる人が求められています。

国際社会で必要な コミュニケーションスキルの習得を目指す

中国や韓国からの留学生はとにかく積極的で、授業中でも目の色が違う。国際関係学部の良さは、そんな留学生の姿勢に刺激を受けて日本人学生も積極的になっているところです。今の学生は少し良い子すぎるところがあり、もっと大胆に自分の考えを相手にぶつけてもいいのではないかと思うこともありますが、そんな中、立命館には自分のやりたいことをはっきりと言える学生がいる。活気に満ちたその姿はとても心強いですね。

「現場での外交を知りたい」という熱意を持ってやってくる学生が多く、授業では「学問としての外交」と「実際の外交」とをバランスよく学べるように心がけています。現在、学部や大学院で三つの講義を担当していますが、どのクラスでも必ず言うのは「しっかりと自分の考えを持って、それをスピークアウト（発言・発表）しろ」ということ。すべて英語で行なう授業がありますが、プレゼンテーションは決してネイティブだから有利というわけではありません。大事なのは上手に話すことではなく、自分の考えとその理由を明確に相手に伝えるということ。多少文法的な間違いがあっても構わないから、考えていることをはっきり言えばよいのです。もちろん初めは簡単ではありませんが、学生たちは回を重ねるごとに成長し、講義終盤には1回生でも北方領土や北朝鮮問題などについて英語できちんと自分の考えを発表できるようになりました。感激しましたよ。指導する立場としても非常にやりがいを感じています。

交渉術においては、自分の意見をとにかく主張して相手を自分のペースに巻き込んでしまうという方法を採ることもある。また、日本では相手を攻撃するということはあまりしませんが、相手の問題点を指摘することも、自分の意見を伝えるのと同じように大切なことです。学生たちには、国際社会で必要なコミュニケーションスキルの習得を通して、グローバル社会に生きる一員としての心構えを育んでもらいたいと思っています。

「明日へ」の気持ち、持ち続けて

これまで私がいた外交の世界では「交渉」という場面が多く、どうすれば日本にとって最善の形で交渉成立できるかを常に考える必要がありました。そんな時に大きな力になっていたのは「愛国心」。今の若者にとっては「愛国心」など古くさい話かもしれませんが、世界とかかわればおのずと母国を愛するようになるもので、それが根底にあるからこそ世界と対等に向かい合い、信頼関係も築くことができる。国際社会と関わっていくのに不可欠なこの愛国心、「patriotたれ」についても、学生たちと大いに議論を深めてみたいと思っています。

日本ではいま、グローバルに生きることが求められている。おそらくそれは学生も分かっているのですが、どうすればよいのかがまだ分からず模索している状態なのだと思います。そんな学生たちに、経験をまじえた生きた話題で「グローバル」とはどういうことかを伝えていきたい。「明日へ」という気持ちで、若者たちがこれからも前へ進み続けてくれることを期待しています。

Profile : Mitoji YABUNAKA
1948年、大阪府出身。69年に外務省入省。外務省では、シカゴ総領事や、北朝鮮問題を協議する六カ国協議の日本首席代表などを務め、2010年8月に外務事務次官を最後に退官。2010年、立命館大学国際関係学部特別招聘教授に就任。外務省顧問（現職）。主な著書に『国家の命運』（2010）など。